

◆ 陰影を生む小屋

2016年 奈良県景観デザイン賞 リノベーション賞 受賞

松村 泰徳

今回ご紹介するのは、空きガレージを活用したリノベーション事例です。空き家問題が取り沙汰されている昨今ですが、用途変更をすれば建物の可能性が一気に広がります。それと同時に、地域景観に寄与する「場」に仕上げることも、建築家の重要な役割だと考えています。



改修後-夜景:内部から漏れた灯りが、上部の膜に透過し柔らかく通りまで届く

改修前:強い閉鎖性を感じる

■ 作品のコンセプト

景観について日頃街を歩いていて感じることは、地面に影を落とす建築物や工作物などが、子供の頃に比べると随分少なくなったことです。家屋の深い庇、塀からせり出す庭木、空き地やあぜに自然発生した様な雑木など... 陽射しの強い日には深い陰影をつくり、雨の日には雨宿りした記憶が何度もあります。

魅力的な景観とは、建物の形態や意匠に留まらず、そういった記憶や、季節・天候の移り変わりによってつくられる豊かな表情や陰影が生み出す場所性が強く関わっているのではないかと考えます。



改修後-昼景:自由に入ることができる空地にはたくさんの影が落ちていている



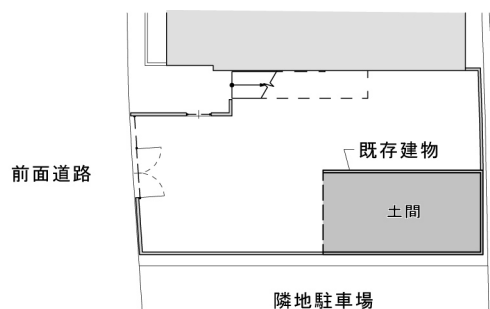
改修後-夜景:陰中の格子越しに内部の雰囲気を感じる。古民家で使用されていたものを再利用しており、不揃いな格子戸がお室を連想させる。

■ 改修概要と周辺へ与える景観的効果

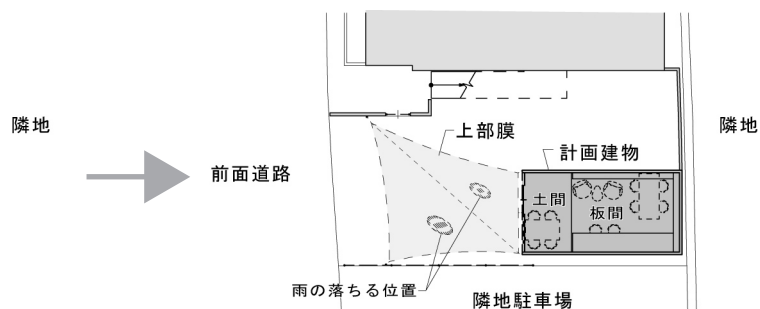
改修にあたった小さな建物は、長い間使われなくなったガレージで、外観はむき出しのコンクリートブロック壁にトタン屋根、サビ付いたシャッターは閉ざされており、ブロック塀に囲まれている通りに対して閉じた建物でした。

主要用途は展示室兼書庫で、内外装を改修し、接道面の塀やゲートは撤去し道路に開きました。そして建物から接道面までの空地上に膜を張り、地面に陰影をたくさんつくりました。照り付ける陽射しは影に変わり、風が吹けば樹木のように揺らぎ形を変え、叩きつける雨は網目を透り局所的に柔らかく落す。日が沈めば格子戸から漏れる灯りは内部の様子がうかがえ、通りまでやさしく照らすようにしました。

豊かな表情や場所性が生まれたのではないかと考えています。



改修前-配置平面図



改修後-配置平面図 0m 5m

◆ 形を変えながら在り続けること

森本 晃尚

先日、今年3月閉校になったばかりの元京都市立淳風(じゅんぷう)小学校で開催された「見立てと想像力——千利休とマルセル・デュシャンへのオマージュ展」を鑑賞しました。日本とフランスの現代美術家8名がそれぞれ1室ずつ教室を使い、それぞれの教室に合わせた作品を創作するという企画でした。訪れた日は参加アーティストの宮永愛子さんらのトークイベントが開催され、現代アートが作られていく過程を聞くことができました。

展示会のタイトルにも登場するマルセル・デュシャンは、ちょうど100年前、見た目重視の芸術を批判し、作品について考えることを楽しむ芸術(現代アート)を生み出したとされています。とはいえ、私はこれまで現代アートは予備知識無しに感覚的にその場で楽しめるものだと考えていました。しかし宮永さんの話を聞くと私の印象とは異なり、彼らは深く考え論理的に作品を構成し、鑑賞者にも同じようにその作品について深く考えることを望んでいるとのことでした。

宮永愛子さんは日用品をナフタリンでかたどったオブジェなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める作家で、今回の展示も理科準備室の標本箱にナフタリン作品が閉じ込められています。ナフタリンはタンスの中に入れておく防虫剤で馴染みある通りいつの間にか無くなっているものですが、それは無くなっているのではなく形を変えて物質としてはどこかに存在し続けている。それは世界の全ての事物に共通しているという観念的なメッセージが込められています。

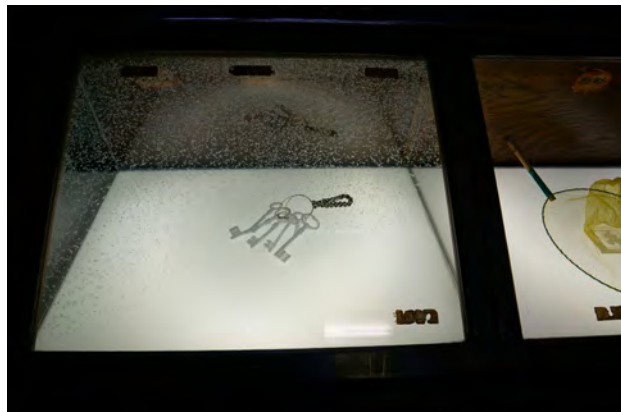
この小学校は昭和6年に建てられた趣深い建物ですが、それ故に耐震補強が難しく閉校に至ったようです。この建物の90年近い小学校としての出来事は、気化したナフタリンのように卒業生の記憶の片隅にとどまっているのかもしれませんが、用途や形を変えてでも建物として在り続けてほしいものです。



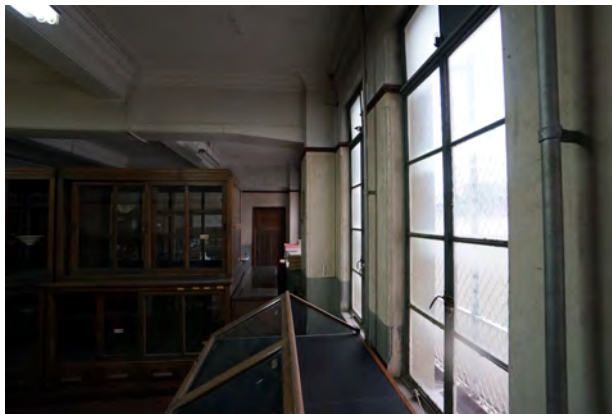
会場出入り口(学校の通用口)



普通教室の展示風景



宮永愛子さんのナフタリン作品がおさめられた標本箱
(ガラスの表面には気化したナフタリンが再結晶化している。
いずれこの鍵の形をしたナフタリンは消えてしまう。)



宮永愛子さんの作品が展示されている理科準備室

◆ 編集後記

建物の外部でありながら内部のような機能もそなえた軒先は、日除けや雨宿りといった人を寄せ付ける要素をもっています。人間に例えると、腕組みした姿では無く、まるで手招きをしている様なものではないでしょうか。

古い建物をいかに残すかについては、建築的な問題も然ることながら、経済面や社会面などでの問題も同時に出てくる場合があります。時として、残す・活かすことありきの考えだけでなく、現代美術などでの思索による知見が新たな視点や論点を示してくれることもあるようです。(橋爪 恒平)

◆ 編集メンバー

井戸田 精一	SDIイドタセイイチアトリエ
辻 祐司	辻 建築設計室
何左 昌範	さざりな計画工房
橋爪 恒平	atelier nest-アトリエネスト-
松村 泰徳	松村泰徳建築設計事務所
米田 巧	TAKUMI建築設計室
坂本 雅之	建築設計事務所アニコ
森本 晃尚	SDIイドタセイイチアトリエ

編集・発行 [アーキテクトキャラバン]

大阪事務局/
SDIイドタセイイチアトリエ
東大阪市吉田本町3丁目5-12-1004
TEL : 072-951-4668

奈良事務局/松村泰徳建築設計事務所
奈良県葛城市北花内261-5
松村ビル 2 F-WE S T
TEL : 0745-69-5938

URL: <https://www.facebook.com/groups/25614507753600/>
Copy right 2010-2017 Architect Caravan All rights reserved

「アーキテクトキャラバン」は、建築に携わる有志が集まり、その活動内容や住まいに関する情報などを、広く皆様へお届けできる場として、年4回季刊誌形式にて発行しております。新築・リフォームに限らず住まい全般のご相談等御座いましたら、遠慮なく左記事務局までご連絡頂きます様宜しくお願い致します。